

父さんはヒーロー

「よし、わかった。すぐ行く」まるでテレビにでてくるイケメンの刑事さんが言っているみたいだけど、言っているのはわたしのお父さんだ。さっき家に帰ってきたばかりで、夕ごはんも食べてないし、お風呂にも入っていない。実は、いそがしくて昼ごはんも食べるひまがなかったらしい。どこからどう見てもイケメン刑事とはほど遠い、くたくたヨレヨレのお父さんが、氣力をふりしぼって家を出て行った。

わたしのお父さんは病院の心ぞう内科で働いている。心さんこうそくのかん者さんが救急車で運び込まれると、病院用のけい帯電話ですぐ呼ばれる。一分でも一秒でも早く手じゅつをしなければかん者さんの命があぶないから、いつ、どんな時でも飛び出していく。お正月でも、お風呂に入っていると中でも。

わたしがまだ小さいころのことだ。家族で愛知県と静岡県との県境にある山から家に帰ると中で、車を運転しているお父さんのけい帯電話が鳴った。こんな遠い所からまさか行かないだろうと思っていたら、「三十分では着かないけれど、できるだけ早く行くようにする。あ、それから〇〇（葉の名前）をヒカチュウで。」え？あのようち園で大人気のモンスターが、心ぞうが止まりそうなかん者さんに十万ボルトの電気ショックを？お父さんがわざわざ行かなくても電気ショックで治る気がしたのに、お父さんはJRRの駅の

愛知県

名古屋市長白壁小学校四年

中村 桃子

そばでわたしたちを車からおろして、悪いけどここからお前たちは自分で帰ってくれ、と言って走り去ってしまった。皮下注（射）を聞きまちがえたことで今でも笑い話になるけれど、その時はひどいお父さんだと思った。

思い出してみると、小学校の入学式の時もクラス写真をとる時にはいなくなっていたし、お兄ちゃんやわたしのたん生日、クリスマスもいっしょにお祝いのことが少ない。「もう、お父さん、そんなに病院が好きならもう家に帰って来なくてもいいじゃん。病院と結こんすればよかったじゃん」いつだったか、そんなことを言ったら、お父さんはすごい悲しそうな顔をしていた。でも、わたしには何も言わなかった。

それを見ていたお母さんが、あとからわたしにそっと、ひとつの手紙を見せてくれた。それは、お父さんがきん急手じゅつをしたあるおばあさんからの手紙だった。「もういつおむかえが来てもいいと思っておりましたが、先生から助けていただいた命、大切にします」わたしは、ちよつとびっくりした。お父さんがこんな風に思ってもらえているなんて。そうか、家の中ではお父さんだけど、病院ではかん者さんたちのヒーローなんだね。

お父さん、たくさんの命を救う毎日で大変なのに、たまに休みがあると、わたしと遊んでくれたり、勉強を教えてくださいありがとうございます。お父さんはスーパーヒーローだよ！